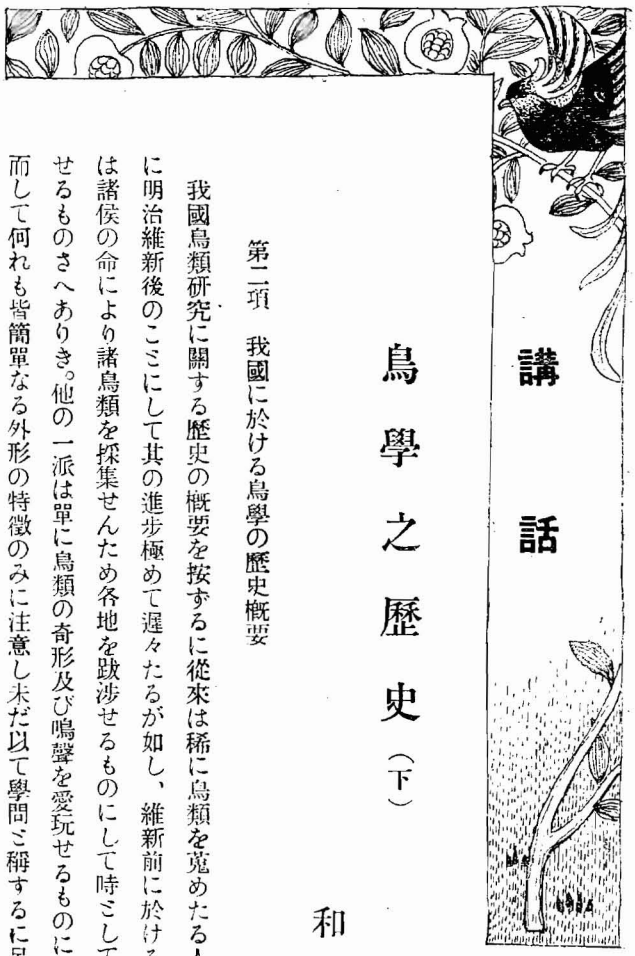

講話

鳥學之歷史（下）

和田干藏

第二項　我國に於ける鳥學の歷史概要

我國鳥類研究に關する歷史の概要を按ずるに從來は稀に鳥類を蒐めたる人ありしも之を眞の學術的に修業せしは實に明治維新後のことにして其の進歩極めて遲々たるが如し、維新前に於ける本邦鳥類蒐集者には二樣の種類あり、一は諸侯の命により諸鳥類を採集せんため各地を跋渉せるものにして時として頗る熱心に行ひ之を家傳の定業の如くなせるものさへありき。他の一派は單に鳥類の奇形及び鳴聲を愛玩せるものにして其の形態の奇こ音聲の美こを競へり。而して何れも皆簡單なる外形の特徴のみに注意し未だ以て學問こ稱するに足らず、只本草家の一部に鳥類の片影を認めしものあるのみなりき。從て著述も一二に止らずこ雖も極めて幼稚なる內容を有せしが如し。當時有名なる鳥類家こして知らるゝは堀田正順、蘇生堂主人（本名未詳）、毛利梅園、佐藤中陵等の諸氏なりこす。而して著述の方面を通覽するに、慶安二年己丑蘇生堂主人鶉書一卷を著して上木し、同氏は更に寶永七年庚寅（紀元二三七〇）には諸鳥呼子鳥三卷を著はし鳥類の飼養法を說述せり。正德三年癸巳（紀元二三七二）に寺崎良安（浪華の人字を尙順こ云ひ杏林堂こ號し醫を業こせり）氏は和漢三才圖會こ稱する一大雜書を作り其の中に鳥に關する記事數多を藏せり。延享元年甲

子(紀元二四〇四)用中長興氏は大平鶴譜を著し鶴の種類及び關係せる事實を輯錄せり。又之より先年享保二年丁酉(紀元二七七七)には佐馬介氏諸禽萬益集を作り諸鳥類の形狀、捕方、飼養法等を記述せり。其の他の著述を年代の順を顧慮せず不順序に記述せんに享和二年壬戌(紀元二四六二)比野勘六氏の作になる鳥背案山子あり、其の內容は諸鳥類の飼付方療養法より本邦鳥舶來諸鳥類の飼養法等あり。次で同氏は文化八年辛未(紀元二四七一)諸鳥馴養秘傳三卷を書き、日本鳥唐土鳥の諸鳥類を網羅して其の形狀產地を說き且飼養法療病法をも述べたり。其の他比野氏は鳥博士續篇及び唐紅毛渡鳥集等を著はし、後者は支那其の他の諸國より渡來せる鳥類の飼養法を記したるものにして享和二年壬戌(紀元二四六二)の作なり、前者は鳥類の系譜飼養の來歷等を記し、和鳥を七十七種に分ちて各形狀飼養法を說き藩主へ奉りしものなり。尙同氏の著に係はる養禽物語(文化年中の作)も有益なるものとす、因に比野氏は薩摩藩の鳥方にして重行と稱せり。弘化四年丁未(紀元二五〇七)には柏原信好氏舶來玩禽一覽一卷を草し舶來禽類凡そ二十六種を列記せり。文化五年戊辰(紀元二四六八)には佐藤成裕(水戸の本草家にして中陵と號す)飼籠鳥(二十卷)を著述せり、之は汎く和漢書を引證して諸鳥の事を詳記せるものにして、書中の種目を擧ぐれば飼法部六十六條、雞部十六種、鳩鴿部二十種、鸚鵡部二十七種、山雀部二十種、駒鶯部二十二種、雀部三十種、諸雀部四十三種、黃鳥部二十三種、烏鵲部二十二種、候鳥部十四種、鳩鵲部四十二種、鷗部二十七種、鵝鴨部三十六種、鶴部二十七種、鷹部一種、隼鵬部二十八種等あり。寬政十一年己未(紀元二四五九)には泉花堂三蝶(十六兵衞と稱す東都の人なり)諸鳥餌食百千鳥を書き諸國鳥類を網羅して圖說せり。仁孝天皇天保十二年辛丑(紀元二五〇一)の春宇久比須考(二卷)なる書は千葉直胤氏によりて著され內容はウグヒスに關する諸種の考證なり、上卷は鶯の說なれども附こして鶯とウグヒスとは異なると云ふことより老ウグヒスをムシクヒと云ふことに及ぶ十三條よりなり、下卷はウグヒスのカヒコの中の杜鵑の說より鶯とウグヒスの異名に至る十三條凡て二十六條の和漢古書百五十九部を參照して考證せり、尙追加するに百千鳥考八ケ條を以てせり(千葉氏は塙保己一の門人にして江戸の和漢學者なりき)。又著者未詳なれども四鴟說なる作品あり、之は鳥族(鴟)の事に關する考證にして幾多の漢書より徵論す、老鴟と云ひ茅鴟と云ひ角鴟と云ひ、梟鴟と云ふ四說を擧げて論斷せるものなり、漢文無點にて記され海保漁村の校正を經論說中には安政萬延の年號あり。光格天皇寬政五年癸丑(紀元二四五三)

關盈文氏海舶來禽圖說一卷を著す、舶來鳥を寫生し其の生態を記せり。尚著者及び年代共に未詳なれども鳥類寫生圖と稱する三十八枚より成れる圖畫あり、內容は鳥類四十餘品の彩色畫に各其の釋名を考記したるものにして鶯二品、番鴨、眞鴨、鳧之一種二品マグソタカ、鷸雉、都鳥、錦鷄、墨是可國雞、ヘラサギ、鴻、四十雀雁、貉、白鵰、鳧之種類六品、青莊鳥、鷄、信天緣、鴟、五位鷺、鴉、鴛鴦、雁、サカツラヒシクヒ、慈鳥、烏、鴉、鵲、鷸二品、鶻、鵰、雉、ケリ、アマサギ、高麗雉、斑鳩、白鴉等を收載せり。

以上の外鳥類に關する著述は頗る多く主なるものを列記せば次の如し。

著述者	書名	卷冊	年代	備考
小野蘭山	蘭山禽譜	一	未詳	和漢禽類を蒐集圖說せり
秋元萬藏	養鶯辨	一	文政元年	養鶯記事なり
未詳	鳥の系圖	一	未詳	鳩の種類五十種の表裏を着色して百圖に描けるものなり
未詳	和漢花鳥譜	二	未詳	和漢稟駝の諸說を編輯せるものなり
未詳	鳩圖	一	未詳	諸種の異鳥百種を着色寫生せるものなり
凡芳子春(加賀)	駝史	一	未詳	鶯の飼養法を評論せり
未詳	百鳥圖	二	弘化二年	鳥類を網羅して椽木、唱雞游の諸類に分ちて詳說せり
鶯舍半藏	春鳥談	一	乙巳	鶯の飼養に關する事項を記せり
未詳	將翁軒禽譜	二	文政十一年	鶯の飼方を記述せり而して藤村如皐の序を載せたり
鼓腹堂山人	鶯飼樣口傳書	二、	戊子	
未詳	鳥詔鼓吹抄	一	嘉永二年	
			己酉	
			安永四年	
			乙未	

泉花堂三蝶	諸鳥飼養百千鳥	二	未詳
堀田正順	觀文禽譜	一	未詳

尚以下書名のみを示して參考に資せんとす。

業餘禽錄　禽譜
飼鳥冊　百鳥圖賛
百千鳥　鳥名便覽
類聚禽譜　止利乃保無
應鶻秘傳　鴆史
蓄翎秘訣　風鳥暗呼類
山封陸禽譜　寫眞鳥かゞみ
水谷氏禽譜　白鷺記

我國に於ける鳥類研究は斯の如く古來幾多の本草學者及び醫家の手によりて研究せられ、其の著述も一二に止らずしてガン、カモサギ、ツル、タカ、ウグヒス、メジロ、フクロフ等の如き普通有用の種類は之を識別し得たりと雖も、是とても往々他のものと混同せるもの蓋し少しとせず、又其の分類の如きに至りては甚だ不完全にして到底學術上寸厘の價値あるものにあらざりき、而るに泰西諸國にありては夙に本邦產鳥類に注目し之か研究に從事せるもの尠からず、今其の一端を叙するも趣味あることなれば左に予の知れる所を述べんとす。

獨逸のシーボルド(Philipp Franz Von Siebold, 1796—1866)氏は文政五年(西紀一八二二年)職を和蘭東印度會社に奉じ文政六年(西紀一八二三年)和蘭貢使に隨ひ我國に來り、出島醫官として前任者の後を承け醫術を以て人に施し我國醫家に傳ふるの間に我國生物學上

の研究に心を潜めたり、其の結果蒐集せる鳥類に就き西紀一千八百四十五年乃至一千八百五十年に亘り、テンミンク(Temminck)及びシュレーゲル(Schlegel)兩氏は Fauna Japonica, Aves なる主題の下に佛文を以て完全に日本產鳥類を記載せるものを出版せり、蓋し本書を以て我國鳥類を眞に科學的に研究せる嚆矢とす。次でブラキストン(Blakiston)及びプライアー(Pryer)兩氏は明治十三年(西紀一八八〇年)Catalogue of Birds of Japan を發表し、間もなく明治十五年(西紀一八八二年)には又 Birds of Japan, Trans. Asiatic Society を、更に明治十七年(西紀一八八四年)には Amended List of Birds of Japan を出版して大に我國鳥學者の志氣を刺戟せり、明治二十年(西紀一八八七年)タクザノスキー(Taczanowski)氏は Liste d. Oiseaux rec. en Corée を、又翌くる明治二十一年にはタクザノスキー氏は Liste suppl. d. Oiseaux rec. en Corée par Kalinowski を公表せり、明治二十三年(西紀一八九〇年)シーボーム(Seebohm)氏は Birds of the Japanese Empire を出版し、明治二十四年(西紀一八九一年)理學博士飯島魁(大正十年三月卒す)氏は List of the Birds of Japan を動物學雜誌に發表し、次で明治二十六年(西紀一八九三年)東京帝國大學元理科大學(今の理學部)紀要に Notes on a collection of Birds from Tsushima を發表し、明治三十一年(西紀一八九八年)には保護鳥圖譜を出版し大に我國鳥學者の面目を發揮せり。以後引續き之が研究に從事するもの多きを加へ明治三十三年(西紀一九一〇年)には多田綱輔氏臺灣鳥類一班を出版し、翌三十四年(西紀一九一一年)飯島氏は我狩獵法律の改正と共に前記保護鳥圖譜を訂正增補し當時の保護鳥類八十四種を擧げ說明するに一々鮮明なる圖版を以てせり。明治三十八年(西紀一九〇五年)には理學博士八田三郎及び故村田庄次郎兩氏は札幌博物學會報に A preliminary List of the Birds of Hokkaido を發表せり。又同年故小川三紀氏は動物學彙報に Notes on Mr. Alan Owston's Collection of Birds from the Islands lying between Kiushiu and Formosa を發表し、其の後從來の諸目錄を參酌し最近に行はるゝ分類法によりて明治四十一年(西紀一九〇八年) A Hand List of the Birds of japan を動物學彙報に發表し本邦鳥類研究上に一大新面目を發揮するに至れり。尙小川氏は本邦鳥學者の權威にして分類の方面は勿論鳥類の季節的移住をなすこと等にも注目し、極力其の研究に熱注せしが其の眞隨の公表を果すに先ちて逝去されしは吾人の深く哀惜に堪えざる所なり。其後諸篤學者出で鳥類に關する研究に從事し明治四十五年(西紀一九一二年)內田淸之助氏は動物學雜誌第二百八十三號に千島產鳥類目錄を發表し、又動物學彙報には A Hand List of

Formosan Birds と題し臺灣產鳥類に關する文献を發表し、尙引續き有益なる文献を動物學雜誌及び其の他の誌上に發表し本邦鳥學を開拓すること甚大なり。軈て明治四十五年(西紀一九一二年)には東京帝國大學元理科大學動物學教室内に日本鳥學會の創設を見るに至れり、本會の目的は鳥類に趣味を有するもの〻懇親を計ることは勿論鳥類に關する學術の進歩を促すこと及び鳥類愛護の思想を普及せしめ鳥類保護增殖を圖ること等にあるが故に、年二回機關雜誌「鳥」を發行するの外臨時刊行物を出版し每年春秋二回會合して鳥類に關する講演會、展覽會等を催す、其の他鳥學的探檢を擧行すること等の事業をなすが故に本邦鳥學發展の徑路愈々確實となるに至れり。最近に至り麿司信輔、黑田長禮兩氏は何れも鳥學專攻の士にして巨額の私金を投じ或は個人研究所を設け、或は海外探險等を行ふ等極めて熱心に斯學の研究に從事するが故に本邦鳥學は勿論世界鳥學上にも貢献すること甚大なりとす。一方政府に於ても各地の鳥類調査に着手し明治四十五年(西紀一九一二年)には農商務省農務局にて内田清之助氏をして鵜類の調査をなさしめ鵜類圖說を出版し又同年海產保護鳥圖說をも出版して世に公表するに至れり。大正三年(西紀一九一四年)には樺太廳に於ても故村田庄次郎氏を囑託して同島の動物を調査せしめ、其復命を樺太動物調査報告と稱して世に普く頒布せり、同書の内容は哺乳類及び鳥類の調査なれども五分の四は鳥類に關する記載にして頗る斯學研究に參考となるものなり。尙樺太の鳥類に就きては曩にレーンベルグ (Lönnberg) 氏の調査あり即ち Contributions to the Ornis of Saghalin を東京帝國大學元理科大學紀要第三十三冊第十四編に發表せられ同島產鳥類を凡そ百八十種となせり。以上の外前記篤學者は諸種の方面に涉りて鳥類を研究し諸誌上に發表し以て斯學の發展を企劃しつゝあるなり。今參考の爲め本邦鳥學に關する著書の一端を紹介し如何に本邦鳥學者は努力しつゝあるやを示さむとす。

著者	書名	發行年代	發行所
黑田長禮	世界の鴨	大正元年	日本鳥學會
同	世界の雁と鵠	大正二年	同

内田清之助	日本鳥類圖說（上下）	大正三年	警醒社
同	日本鳥類圖說續編	大正四年	同
仁部富之助	郭公の蕃殖に關する研究	大正四年	日本鳥學會
黑田長禮	臺灣鳥の鳥界	大正五年	同
川口孫治郎	杜鵑之研究	大正五年	寶文館
黑田長禮	鮮滿鳥類一班	大正六年	日本鳥學會
鷹司信輔	飼ひ鳥	大正六年	裳華房
内田清之助	鳥類講話	大正六年	同
内田清之助 仁部富之助共編	鳥類の渡り及蕃殖期	大正七年	東京動物學會
黑田長禮	鵜千鳥類圖說	大正七年	裳華房
同	六鄕川口に於ける鵜千鳥類の「渡り」	大正八年	日本鳥學會
籾山德太郎	邦領南洋諸島產鳥類	大正十年	同

（尙動物學雜誌及び諸誌上なる文獻及び科學的ならざる飼養鳥に關する著述は紙面の都合上玆に省略す）

以上の出版物により我國鳥學研究者は大なる便益を享け着々各地に斯學研究に着手せんとする者多きを加ふるに至れり。又一方政府は大正七年四月我國内地の狩獵法全部を改正し大正八年四月より農商務省にては狩獵鳥類の種類決定のため野禽類の調査を開始し、技師内田清之助氏主として之が任に當り其の結果同年九月一日より狩獵法律の實施を見るに至りたるが故に、各府縣に一名若くは二名宛の狩獵取締官吏を設置し以て其の効果を擧げむとせり。而して取締官吏には動物學殊に鳥學の知識を有する者を選定したると同時に此等の者に狩獵事務に關する講習會を同年七月十五日より向ふ一ヶ月間東京農業大學に於て開催し、狩獵法及各國狩

獵法、刑法及び刑事訴訟法、銃砲火藥及其の取締、動物學大意、鳥類生態學及鳥類保護、應用昆蟲學、狩獵鳥獸論、甲種狩獵術、乙種狩獵術其の他科外講話及び實習等の諸學課を講習せり。更に同年秋期より國費を投じて農商務省直轄の鳥類實驗所を東京府下南多摩郡多摩村字連光寺山元御獵場内に設置し、野生鳥類の習性並に人生に及ぼす利害關係及び利用の研究より進では歐洲産、支那産等の鳥類の孵化育成又は之と内地産鳥との交配等を試驗するの機運に向ひたるのみならず、他方に於ては全國數箇所の學校農事試驗場、測候所等に依託して諸鳥類「渡り」の時期及び蕃殖季等を調査せしめ斯種研究の材料を蒐集しつゝあり。又大正九年六月一日より向ふ十日間第二回の狩獵に關する講習會を東京農業大學に於て開催する等諸種の施設を以て斯界の開拓を企圖しつゝあるが故に、必ずや近き將來に於て泰西諸國に遜色なき境域となることゝ疑なかるべし、本邦鳥學に志す者豈奮勵努力せざるべけんや(完)

(泰西に於ける鳥學の歴史はリンネー時代以前を詳記して他は大略す。我國鳥學歴史は大正十年五月頃迄を限度とせり)